プラトニックラブ・ララララ

七色ちきん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラトニックラブ・ララララ

【Ｎコード】

Ｎ８０１３Ｋ

【作者名】

七色ちきん

【あらすじ】

親指姫パロ。２３歳の女の友情の話。

十年来の親友と、ランチに行ったときのことである。
私たちは、今年２３歳になる。
中学校からの友情を保ったまま、社会人になった。
よく今まで付き合いが続いたな、と時々不思議におもう。

彼女は金香という。
なんでもできる、なんでももってる、彼女はそんな人だった。
彼女は家柄も頭もよく、非常に優秀な生徒だった。先生受けもよかった。
男の子にもよくもてた。とても綺麗な顔立ちをしていた。
なんでももってる完璧な彼女は、当然他人の助けなんて必要とせず、人付き合いというものを好まない人だった。むしろ積極的に厭っていたように思う。

対して私は、団子鼻の、良くも悪くも普通の少女だった。
男の子にももてるわけでもなく、成績はよくて中の下で、それをことさら当たり前のことして受け止めていた、普通の女子中学生だった。ありふれた日常の中で特別でありたいと思いながらも、特に誰かに必要とされるわけでもなく、私は群集に埋没していた。

改めて考えてみると、よく私は彼女と一緒にいられたなあ、と思う。
どう考えても、私は彼女よりも劣等だった。
それはもちろん今でも変わらない。
金香といることで、なおさら私の存在は薄くなっていただろうと思う。

そういえば、とふと思い出す。

「そういえば最初のころ、私は金香のことあんまり好きじゃなかったなあ。」

私の初恋の人も金香がすきだったし。
私が３８点しかとれなかった数学の試験、金香は９１点だったし。

金香は、なにを唐突に、という顔をしてパスタを口に含んだ。

「どうして私たち、ともだちだったのかな。」

金香は、口に含んだパスタを咀嚼し、覚えてないの？と問いかけるような目で私をみた。
首をかしげた後、ふふふと笑って私を見た。
かわいいな、とおもう。

「ゆとり授業で、将来についてのディベートがあって、燕が私に声をかけた。」

それがきっかけだよ、と言って金香はまたふふふと笑った。

ゆとり授業、私は当時を思い出す。

私たちの通う中学には、『ゆとり授業』が週に1度の頻度で設けられていた。

道徳について学ぶ時間だった。生徒の情操教育の一環で、ゆとり授業中に、将来について生徒同士で話し合う機会が与えられたことがあった。思春期の生徒に、将来へ向き合うことを促す意図で作られた時間だと思う。

たまたま私は金香と同じ班になった。

私も同じ班の子も、それなりに授業に参加する中、金香はひどくつまらなそうにしていた。

集団の和を重んじる私は、金香に声をかけたのだと思う。

――　金香さんは将来なにになりたいの？

そういえば、当時は『さん』付けで彼女を呼んでいた。

――　とくにない。

――　何にもないの？

――　ない。

ひどくうっとおしそうに金香は答えていた。

当時初恋の真っ只中だった私は、安易に彼女に尋ねた。

――　じゃあ、金香さんはすきな人とかもいないの？
――　その人と結婚したいとか思わないの？
――　いないし、おもわない。
――　そんなに綺麗なのに。
――　男の子もみんな言ってるよ。金香さんみたいに綺麗な人と付き合いたいって。

実際私の初恋の彼も金香が好きだったわけだし。

そうだ。だんだん思い出してきた。

「『男なんて、ヒキガエルと同じだろ』、金香はそういった。」

――　男なんてセックスしか頭にない低能のサルだよ。
――　大体、私は自分の容姿で得したことなんて一つもない。
――　電車にのれば痴漢にあう。話したこともない人から告白される。
――　興味がないと断れば疎まれて、悪くしたらストーカー男に付きまとわれる。
――　私のことなんて何もしらないくせに。
――　二言目には『君のことがすきなんだ』『どうして分かってくれないんだ』
――　『どうして、知り合うこともせず僕のことを切り捨てるんだ』
――　あいつら示し合わせたようにそう言うんだ。私の見かけしかしらないくせに。
――　『愛してる』って言葉を免罪符に使うなよ。

心底軽蔑したように吐き捨てた金香に、私はなんて言ったのだろうか。

私が思い出す前に、金香が応えた。

「『それなら親指姫になればいい』、燕はそういった。」

——　親指サイズなら、男の人だってそうそういかがわしいことはできないよ。

——　えっちなことはできないし、もしかしたらキスだってできないかもしれない。

——　それでも金香さんのことが好きだって言うならさ、それはもう信用に値するよ。

「それから、燕はこうも言った。

『正直、金香さんは潔癖すぎると思うけど。
それも運命なのかもしれないね』、って。」

——　運命？

そういえば、
金香がわからないといった表情を浮かべるのを、はじめて見たのがあの時だった。

——　うん、今おもいだしたんだけど、親指姫って、チューリップから生まれるんだよ。

——　おかあさんが、魔女からもらった種をまくと、チューリップが咲くの。

——　親指姫はさ、そのチューリップにキスをしたら、その中から

生まれてきたんだって。

「燕はすごく真剣だった。」

そうだ、私はすごく真剣だった。

そして、訝しげな彼女をみて私は得意げにいったのだ。

――　だからさ、てゆうことは親指姫のお母さんは性交なしの懐胎なんだよ。

――　だからさ、プラトニックラブといったら親指姫ってこと。

――　金香さんは親指姫になったらいいよ。

それからさ、金香はくすくす笑って続けた。

「それから、私は呆けて何もいえなくなっちゃったんだけど。

きっと燕は、私が親指姫について決めかねてると思ったんだろうね。

すごく真剣に私を励ましてくれた。

――　だいじょうぶ！

――　金香さんは美人だから、きっと親指姫になれるよ。

「・・・それは覚えてない。」

ほんとに覚えてなかった。

私などに言われなくても、金香が美人なのは本人が一番わかっていただろうに。

「言ったよ。あれは私の人生の岐路だった。

燕がそういったから、私はお付き合いする男性にはプラトニックを要求することにした。」

「ちなみに成果は？」

「連戦連敗だね。」

まだ四半世紀も生きていないけど、男は総じてエロガエルだと実感するに値する、

金香はそういってケラケラと笑った。

「プラトニックラブをつらぬくには１０８つ鐘をたたいても足りないかもしれないね。」

そういって私もケラケラとわらった。

だからさ、金香はわらいながら言った。

「だから今まで私たちの友情が続いてきたのは、偏に私が燕をすきだったからだよ。」

「・・・っ。」

くそう、と思う。

なんでもできる、なんでももってる、金香はそんなやつだった。

結局のところ、いつだってたった一言で私は金香につかまるのだ。

――　それなら、あなたを燕にするよ。

私は１０年前に、親指姫をモグラから救い出すヒーローになったのだ。

「結局のところ、プラトニックラブをつらぬける男の人よりも、」

金香は微笑む。

「私は燕がいればそれで幸せだってこと。」

――　今日からあなたを『燕』って呼ぶよ。

私は金香の特別で、金香は私の特別で、とどのつまり私たちは幸せなのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8013k/

プラトニッククラブ・ララララ

2011年1月8日22時00分発行